ご挨拶

利他の化身

久留女木の棚田は遠い。浜松市街から車で北へ、国道、県道、脇道からさらに狭い道へ。やがて都田川水系の渓間を縫うように登れば農道があり、そこへ入りますと、猪よけの柵の前に。あとは徒歩で登るのです。

一帯の斜面の開墾が進んだのは、井伊直虎の曾祖父が今川氏に追われ、近くに居を構えたころであったとか。八百枚の田の土に立ちますと、遠くに青山かすみ、振りかえり茂みの中へと歩めば、澄んだ水が静かに流れています。それこそが、村人が愛した竜宮小僧を葬ったあとに湧き出た泉とのこと。今も手を合わせる人がおられます。掬えば山の香、口あたりはなめらか、身が清まる思いがいたします。

言い伝えとは ―― むかし、村人が困っていると、不思議な小僧があらわれ、手伝ってくれた。しかも何度も。「どこの小僧さんだね」と問えば、「どこでもいいよ」と。小僧は、竜宮に通じる大淵からあらわれるので、竜宮小僧と呼ばれるように。何の見返りも求めない小僧にお礼をと、あるとき村人が、小僧が「蓼汁だけは食べさせないで」と言っていたのに蓼汁を出してしまったところ、一口で絶命。許しを乞い、亡骸を村中の人の手で、小僧が願った榎の大木の下に葬ったところ、根元から水が湧き出し、いまも村人を助けている ――

棚田といえば、水の分配が大変です。しかし久留女木には我を張りあう向きもなく円満の出。「竜宮小僧のおかげです」と。本学の学生たちが、ここで耕作を始めたのが二〇一六年。翌年、大河ドラマ「おんな城主 直虎」放映。そのころ浜松商工会議所では、ドラマで時折語られる竜宮小僧の〝利他の心〟を街の宝にとの声が。ほどなく、本学学生デザインの衣装をつけた小僧さんが街の音楽祭に登場。この伝説の絵本や紙芝居もつくられました。すべて、棚田を守る「久留女木竜宮小僧の会」の方がたに助けられてのことです。

これまで本学の「薪能プロジェクトチーム」は、十八年にわたり古典能の公演実施につとめましたが、今年は、この新作に挑みます。本学の舞台に久留女木の天地がたちあらわれ、輝きますよう、祈っております。

静岡文化芸術大学
学長　**横山俊夫**

第19回　静岡文化芸術大学　特別公開講座

新作能「竜宮小僧」

作　梅若　猶彦

第 19 回　静岡文化芸術大学 特別公開講座

SUAC

公立大学法人
静岡文化芸術大学
SUAC

主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
運営：静岡文化芸術大学薪能プロジェクトチーム
後援：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、
　　中日新聞東海本社、静岡新聞社・静岡放送

十月九日（水）

第一夜　能講座

一、開会　あいさつ
　梅若 猶彦（能楽師・静岡文化芸術大学 文化政策学科 芸術文化学科教授）
二、学生による 新作能「竜宮小僧」のストーリー解説
　薪能プロジェクトチーム
三、講師紹介
　鑓水 美緒（薪能プロジェクトチーム代表　芸術文化学科二年）
四、講演　東海地域の能楽史
　講師
　飯塚恵理人（椙山女学園大学 文化情報学部 教授）

※ 講師プロフィールは次ページをご覧ください。

十月九日（水）

能講座

講演　東海地域の能楽史

講師　**飯塚　恵理人**（いいづか えりと）

椙山女学園大学 文化情報学部 教授

〈経歴〉

昭和三十六年アメリカ・シカゴ生まれ、愛知県在住。筑波大学第二学群比較文化学類卒業、筑波大学大学院博士課程文芸言語研究科日本文学専攻で中世文学、特に謡曲本文について研究。平成三年からは愛知県名古屋市にある椙山女学園大学にて、文学・日本文化論等を教える。現在は「東海地域の能楽史」、「外国人・初心者向け能楽教材の開発」、「夢幻能の成立」、「明治から昭和の古典芸能アナログ音源のデジタル化と発信、アーカイブ作成」等を研究テーマとしている。講師から一言：「古典芸能のSPレコードやオープンリールテープ、番組台本などをお持ちで寄贈を考えておられる方、ご連絡ください。」

十月十日（木）

第二夜　能公演

第十九回静岡文化芸術大学能

とき　令和元年十月十日（木）十八時開演

ところ　静岡文化芸術大学　講堂

新作能

竜宮小僧

竜宮小僧　井上真珠乃

姥　泉　雅一郎

尉　梅若　猶彦

僧　福王　和幸

大鼓　大村　滋二　　太鼓　上田　慎也

小鼓　荒木　健作　　笛　藤田　次郎

処の者　井上　松次郎

後見　赤松　禎友

観世銕之丞

地謡　吉沢　旭　井戸　良祐

鶴　克彦　梅若長左衛門

水田　雄晤　久田　勘鷗

山中　雅志　梅若　堯之

狂言方働き　井上　蒼大

佐藤　融

ワキ方働き　喜多　雅一

新作能「竜宮小僧」

あらすじ

物語の始まりは、都のある僧侶が不思議な夢を見たことからはじまる。夢の中で一人の少年が僧侶に語りかける。「自分は遠江にいるものである。すでに死んでしまっているが、ひとりぼっちで寂しい。供養してほしい。」夢から覚めた僧侶は、この夢がただ事ではないと感じ、遠江への旅を始める。遠江へ着くと霧が急に濃くなり、休んでいると一組の老夫婦を見かけた。老夫婦は大淵の水を厳かにすくった。そして心の渇きを満たさなければならない、と話していた。気になった僧侶が老夫婦に尋ねると「竜宮小僧が蓼を食べさせないでくれ、と言っていたのに、私たちが蓼汁を出して死なせてしまった。そのことを今でも後悔している。自らも亡者で、竜宮小僧を供養されるなら、自分たちも供養してほしい。」と語り、老夫婦は消えうせた。そこへ男が大淵の浅瀬に鰻釣りにやって来る。僧はその男に頼んで竜宮小僧の山中の墓まで案内してもらう。弔っていると竜宮小僧が土の中から泥に染まった姿で現れる。

たちまちにして季節が秋から春となり、紅葉は満開の桜に変わった。棚田での田植えが始まり、それを見て小僧は涙して喜び、やがて元の土の中に消えていった。

作者より

たしか本年、平成三一年の四月頃だったと思います。「今年の薪能は竜宮小僧でいきましょう」という案が、芸術文化学科二年の鐘水美緒さん、大学事務局 地域連携室の宮野 哲さんと話し合っている時に出たのを覚えています。

わたくしはこれまで新作能にはそれなりに関わり、演出などを担当してきましたが、能そのものを書いた事はありませんでした。今回こうして自分で書いてみると、能独自の文学性に気付かされました。

世阿弥も重要視していた〝本説〟は、能以前の古典文学作品等の主題引用等の事ですが、出典の文体をそのまま能に引用する事は難しいと感じました。何故なら何となく違和感を生じるからです。それが能のもつ数々の定型からはみ出す事に起因するからでしょう。今回の新作能は本説 にあたるのが伝説ということになります。考えた末、夢幻能の形を採用し、竜宮小僧は既にこの世にいないところから始まることにしました。

この企画を支えて下さった能楽関係者の皆様、また脚本への助言をくださった横山俊夫先生、金子和恵様、そして久留女木竜宮小僧の会の皆さま、蓼汁についてご教示下さった万葉の森公園 万葉亭の皆様と万葉風土研究家の山下智之様にも感謝いたします。

学生薪能プロジェクトチームの皆さん、大学関係者の皆さん、やっと当日になりました。この半年は長くも短くも感じております。ありがとうございました。最後になりましたが、この作品を観に来てくださった皆様に感謝いたします。

静岡文化芸術大学
芸術文化学科 教授
梅若 猶彦